



## 記念講演「輝いて生きる」

歌手 ジュディ・オング

皆様こんにちは、今日は大きな太陽に迎えられるように、皆様がポリオ撲滅という大きなプロジェクトをもって、世界と

ともに歩んでいることを、心から尊敬申し上げます。今日は歌ではなく、お話でやってまいりました。

### 魅せられて

せっかくですから写真だけ見ましょう。(写真がスクリーンに映し出されました。大きな拍手)これはもう何年着ているかわからないんです。ちゃんと作り直してはいまずよ、最初は1979年です。私はその時ちょうど5歳でした。(笑い)

今日は、「輝いて生きる」という題目でお話いたしますが、その前に「魅せられて」の話を少し聞きたい？(拍手)今言いましたように1979年にこの曲は生まれました。池田益寿夫さんが書き下ろした「エーゲ海に捧ぐ」という小説がありました。それが映画化されるということで、池田益寿夫さんが初めての監督をなさり、この映画はギリシアで撮影されました。

これを上演するにあたって、本編の曲は、エンディオ・モリコーネさんというイタリアで有名な巨匠が作曲なされました。日本でこれを宣伝するにあたって、なにか曲があった方がいいのではということで、当初はイメージソングといいましたが、「魅せられて」が書かれました。

この「魅せられて」を歌うにあたって、プロジェクトを組んでいる皆さんが「無名の人がいいよ」ということで、私も少しは歌の方でも知られていましたが、CBSの酒井ディレクターが、「それでは名前を出さなければいいんじゃない」、ということで、名前を伏せて、「魅せられて」を歌いました。

この「魅せられて」という歌は非常に難かしくて、今でも歌うときは緊張いたします。なぜかといいますと、全部の歌詞に音符がついています。少しでも余裕をもって、緩やかに歌おうとすると、間に合わない、酔いしれると音痴になります。大変に難しい歌なので、いつも丹田に力を入れて爪先立つ感じで歌う歌なんです。

私の人生に大きな、大きな変化をもたらしてくれたのが、「魅せられて」そして、この歌詞も「好きな男の腕の中で違う夢を見る」と、どうしようというのって？そんなのどうやって歌うのって？作詞は阿木燿子さんと、その阿木燿子に聞きましたら、「そんなのね、シャー、シャーと歌えばいいのよシャー、シャーと」あっシャー、シャーということで、ずっとシャー、シャーと歌ってきました。

その「魅せられて」もいろいろな所に私を連れてって

れました。一度は万里の長城で歌いました。それはお正月番組でした。その万里の長城の山の峰々の上を長城が続いていくわけですね、そこに立って、「魅せられて」を歌いました。

八達嶺というところでございましたが、皆さんいらしたことはございますか？いませんか？あれは一見の価値はあると思いますよ。山の上を砦のように走っています。この八達嶺というところが一番整備されてきれいになっています。

八達嶺を中心に見て右側、皆さんから言うと左側です。これが女坂といって、皆さんえらい方もそちら側にいらっしゃる。もう片方が男坂といまして、激しくて、場所によっては壁をよじ登らなくてはならないようなところなんです。

その時のディレクターは男坂で歌いましょう、というのです。仕方なくいつもの「魅せられて」の衣装で、こんな険しいところを登っていくのです。私も覚悟を決めました。これでやらないと言ったらお正月番組に穴が開いてしまいますから、朝6時に行って、この衣装に着替えまして、足はヒールなんて履いていられませんで、スニーカーを履いていつものドレスを着て、しょうがないので、ベルトでたくし上げて、寒いので上からコートを着て、その姿で、山を登っていくわけなんです。

一生懸命よじ登って頭もきれいに飾り付けています。やっとたどり着いたところで、後ろから「オーケー」っていう大きな声が聞こえたので振り返ると、そこでいいといっていました。

振り返って、コートを取って用意して、アシスタントディレクターが陰に隠れて、カセットを押すわけです。皆さんもカセットの時代でしょ。(笑い)カセットを押しますと、イントロが流れてきます、すると自然に手が開きます。

真ん中あたりのフレーズで、手を真ん中にもっていくのですが、風が吹いて頭にぶつかったりして、ほんとに散々でした。番組になって映っていると、ずいぶん神秘的な感じがしまして、こんな苦労は誰もわからないものだなと、あの時思いました。

そうこうするうちにザ・ベストテンのランクがどんどん上がってきました。世良公則さんの「燃えろいい女」などと一緒に出演していました。黒柳徹子さん、久米宏さんのコンビの頃です。黒柳さんの早口のあのスピードでご紹介いただきまして、出ていきます。

このセットはいつもすぐ凝って作っていただきまして、ほとんどの場合は、宮殿みたいなセットでした。高いところから、延々下にあるマイクまで、歩いていくのがしばしばでした。

あの時は、円形の油圧のリフトで上がりまして、直径120cmくらいしかなくて本当に狭いのですが、周りには黒のジョーゼットで囲んでいまして、円い筒が上がっていくように、私は上の方でスタンバイしています。もう少し大きな

輪がありましてそれもジョーゼットで釣ってありまして、半分透けています。その四方八方をテグスで縛って、イントロがはじまるとセットのお兄さんたちがよいしょ、よいしょと引っ張ります。するとテグスがそのカーテンを持ち上げて、本当に宮殿のようにドレープが出ます。そして私が乗っている円筒が下りてきて歌になります。

ちょうど降りてきたときに歌が始まるようになっていきます。「南に向かう窓を開け」と歌ったら前のテグスが切れて、カーテンがぱさりと落ちてきてしまって、何も見えなくて、お先真っ暗、とっさに「南に向いてる窓を開け」と歌って右手でカーテンを開けました。(笑い拍手)あの時は死ぬかと思いましたが、今年年末になりますと、このビデオはよく拝見します。

そのように私に、いろんな経験をさせてくれた「魅せられて」ですけれど、今日は、「魅せられて」の話でもなく、また、漫談でもなく、「輝いて生きる」というお話を皆さんにさせていただきます。

### 両親が育ててくれた私の語学

私は3歳の時に日本にやってまいりました。3歳といいますが、ちょっと片言でおうちの中でお話もできるくらいです。私の母国語は台湾語です。両親とも台湾語をしゃべっています。

しかし外に出ると、お友達がみんな日本語なんです。隣のみよちゃんは日本語をしゃべってました。遊びたいので、子供というのはものすごい勢いで吸収するのです。吸収するというのは、もちろん頭が柔らかいということもありますが、バックに好奇心という大きな力がありました。

あの子とはどうやったら遊べるんだろう、あの子の名前なんというんだろう、一緒にいたいという気持ち、好奇心が後ろを押してくれて、言葉ができなくてもジェスチャーで入って、お互いがだんだんと意気投合して、挙句、日本語の方が上手になって、台湾語を忘れてしまいました。

そうしましたら、両親が「これではだめだ」と、普段台湾に帰ったらおじいちゃん、おばあちゃんと言葉が通じない、お話ができない、それからもう一つ、アイデンティティーがわからなくなる、「今後はこういうことを決めよう」といって、母と、父と二人で相談をしてあることを決めました。

私が兄と一緒におうちにおなかですぐ帰ってきます。「おなかすいた」と言ったら、母が全然わからないふりをして無視していました。おかしいな、なんで？昨日通じたのに、今日は通じない、それでお兄さんと相談をして、「そう言えば昔もっと違う言葉をしゃべったね、それでしゃべってみようか？」「ママ、パットーヤラ」台湾語でおなかすいたという言葉です。そうしましたら母は台湾語で、「あらおなかすいたのね、さっそくご飯にしましょう」とそう言ったのです。食べ物の力は強い。兄と私はうちの中では、うちの中の言葉、外ではお友達と日本の言葉をしゃべればいいと小さいなりに理解をするわけです。そうやって私の語学を両親が育ててくれました。

### 好奇心を持つということ

「国際人て何？」とよく聞かれます。国際人というのはもちろん語学も大切、知識も大切、でも一番大切なものは何か？それは好奇心を持つことです。この人と話してみたい、この国は、私たちの国とどう違うんだろう、比較文化ですね、こういったことを自分の中で持っているかどうか、でも何よりも大切なのは、語学というのは一つのツールなんです。道具です。

ここにあるこれは眼鏡です。これは道具です。私がみんなを見たいという好奇心があると道具は役に立ちます。語学もそうです。いくら勉強してもそこに置いといたら、それはそこに置かれていた唯一の知識でしかない、それをどのように活用するか？ということが大切なのです。

その底辺に一番大きく力を占めるのが、好奇心です。異国に行ったとき、好奇心があるとその語学で、その国の事を知ろうとする。また逆に、異国から来た方と言葉が通じたいなといった好奇心があったら語学が役に立つのです。この眼鏡のように遠くの皆さんを見るために役に立つのです。私の好奇心をこの眼鏡がサポートしてくれました。

さてこの好奇心というものですが、だんだん歳を取るとやるが多すぎて、そして煩わしくなってしまう。しかし、楽しい、輝く人生を生きるためには、この好奇心が錆びてはなりません。例えば井戸があったら、水があるのかな？カエルがいるのかな？というように中を覗く心があるということが、楽しくて、輝いて人生を送ることができる、ということになるのだと思います。

### 人間には3つの年齢がある

さて、私は人間は3つの年齢があると思っています。1つ目の年齢、これは私たちのいわゆる、自分がいくつだと思っている年齢、肉体年齢ではなくて、精神的年齢の話です。精神的年齢、これは皆さんはいくつに想定しますか？いくつの心でいたいんですか？私は25歳にしています。別に25歳の心を私が持ったからといって、隣の方が転ぶわけでもないし、いいじゃないですか。心は25歳、ですから物を見て、楽しいな、花がきれいだな、そのような好奇心を持つにはやはり、25歳くらいまで、そのあとは忙しすぎちゃって、なかなかできない。ですから25歳です。

そして次は、肉体年齢、これは頑張りましょう。頑張り、人間は健康をもう一度取り戻すことができる。自分の細胞ともう一度話をすると、今日はちょっと炭水化物を少し少なめに、今日はお肉を食べてもいいんだと、そのようなことが自分の細胞と話すとうるのです。

食べすぎたなということは、実は大口開けて、食べ物を横に食べない、一口、一口、食べていく。そうすると、ちゃんと脳からメッセージがおなかに行くと、今はこれくらいよ、ということをお話してくれます。

それを感じ取れば病気もなくなり、しなくなります。良いお医者様は、未来の病気を治す。今、自分の体の維持をきちっとすること、それをすれば未来の病気にならないということです。それでは何をしたらいいか？それは毎日の努力、細胞と話すということなんです。

3つ目は何か?これは、病院に行って書類の右の上に年齢の数字を書きますよね、あれは、書いてからびっくりすればいいんです。(笑い)戸籍上の年齢はただの数字、あれの大切なことは、どういう印象を皆様感じていただくかということかと思えます。

さてこのような3つの年齢の中で、一番最初に言いました25歳の心というのは、一番私たちが何にも好奇心を持っていた年齢です。私たちが例えば25歳の心だったら、一番することは、例えばアーティストの方々がノッテますかというコールに対して右手のこぶしを高く挙げて、「イエーイ」といったんです。忘れませんか?そんなような心を持っていたのよ。それが私のいう好奇心と、25歳の心です。

今日は少し、レッスンをしましょう。今からお稽古いたします。私がこぶしを挙げて、ノッテますかといいましたら、皆さんこぶしを高く上げて「イエーイ」といってください。いいですか。大丈夫、行きますよー、ノッテますかー、「イエーイ」ちょっと遅れた人がいましたが、今30歳くらい、もう一回行きましょう。ノッテますかー、「イエーイ」できるじゃない、今自分で言ったときに、おっできたと思いませんか?隣の人の顔を見てください、10歳若いですよ?(笑い)これが自分にはできる、まだ挑戦できる、好奇心があるぞということの証です。この感覚、これをもって生きていくと、人生すごく楽しいです。

## 大病で得たこと

さて実を言いますと私は二度大病をしております。二度目の大病というのが、36歳の時だったのですけれども、本当に、バツと倒れて救急車で運ばれて、そして入院しました。

当時私は新曲で、東芝日曜劇場という番組のタイトルソングを歌っていました。私の主演ドラマも決まっていた。スケジュールが全部決まっていた。でも病気で倒れちゃった、悔しいです。悔しくて、なんでこんなになっちゃったの、なんでこんなにまでして、仕事を入れたの、なんでもうちょっと前に少し休んでって言わなかったの、そういうことばかり考えて、すると、テレビで、私の曲が流れている、私の代わりに誰かがドラマの主演をしている、心がものすごく硬くなってしまいました。

ところがある日看護婦さんが、さっとカーテンを開けて「ジュディさん今日は熱がないといいわね、アツない、夕方出ないといいわね」といってシャッとカーテンを閉める、その後姿を見て私は泣きました。涙が溢れました。それはありがたいでした。毎日私に笑顔を送ってくれてありがとう、私の体を治してくれてありがとう。

両親は毎日会いに来てくれます。母は、小鳥の親のように一生懸命ご飯を作ってきてくれます。ファンの人はたくさんの手紙を書いてきてくださって、千羽鶴を送ってくださったり、20年も何も言ってこなかった友達から、「あんた頑張りなさいよ、今度会いに行くからね」という手紙が届く、私は、ただ薬を与えられて、病院に入院していても、絶対に治ると思いませんでした。

あの頑張りコール、あなたのためにみんな一生懸命努力

してあなたを元気にする努力をしているからね、というパワーをいただきました。あれで私は元気になったのです。

そうすると、窓の外の空が青かった、すごく透き通って、今日の空のように青かった、それに気づかなかったのです。毎日が悔しい悔しいと、そんなことばかり考えていて、この生きているというすごいことに気が付かないのですね、生きているって当たり前じゃないですよ、生きているのをありがたく思わなければいけない、そして何かできるということをもっとありがたく思わなければいけない、私は自分が再び舞台に立って歌が歌えるようになったら世の中の役に立てる人間になりたいと思いました。

それは歌を通じてもいい、芝居を通じてもいい、版画を通じてもいい、何でもいい、人に少し喜びを感じてもらえる、それを通じて国際交流、お互いの国のことを人対人が触れ合うことによって、その国の風習、その国の人々の考え方、食などもわかります。それができるのが文化だと私は思っています。

万里の長城を降りてきて、紫禁城で平和コンサートを、中国、日本、台湾、香港の人たちが集まって、行いました。その結果、一つの手紙が来ました。もちろん満点の空の下でした。本当にうれしかった。でもうれしかったのはそのあとに来た手紙です。コンサートを seen 来た女の子が、「ジュディさん私は見に行きました。隣の方が歌を歌っていたので一緒に歌いましたが、私は日本語、こちらは中国語でした。でも同じ歌を歌ったんです。」それでその人のおうちに遊びに行きました。「ジュディさん、みんな箸の文化ですね」、日本は箸を横に置くのが正式で、中国は、縦に置くのが正式です。どちらも間違いではありません。それも、それもありがたんだ、このお手紙はそのことを教えてくれました。

そして人々の心がざらついたところは、そういうことを知ることによって、少しずつ柔らかくなる。心の中が柔らかくなると平和につながっていくのではないかと思います。ですから私はライフワークの版画を通じてこのお仕事を続けて行きたいと思います。

## ワールドビジョン

人の役に立ちたいと思った時に出会ったのが、ワールドビジョンというユニセフと同じようなNPOのお仕事です。4,500円で一人の子供が救われます。ご飯が食べられて、医療を受けて読み書きができる学業が受けられます。

読み書きができるということは大変なことです。例えば紙が1枚届くと、それにお水を1リットル入れれば、体が脱水したのが治りますということですが、紙1枚と一つの袋が届いても、字が読めないこの袋は何だかわかりません。でもこれが経口保水療法であることはそれを読めばわかります。一番下の妹が下痢をして大変だった時に、これを作って飲ませてあげると、大体30%から40%は助かります。これが読めるということの強さです。

ワールドビジョンはその子供たちの医療、学業、食、これをサポートして、その上にお金が残る、それを集めて、井戸を掘ったり、学校を作ったり、集会場を作ったりする、そう

いうプロジェクトをスポンサーしていくというプログラムをやっています。東日本大震災、3.11の地震があった時もみんなで出かけて行って、ボランティアの活動をしてくれました。

必要な時に、できる限り頑張って、世の中に役に立つようにと思ってやっていますが、一人の人ができることは限られています。でもその一つのことをやれば一滴の水がいつか大海になる。これも続けて行こうと思うプログラムの一つです。

## 介助犬

もう一つは、我々いつ事故にあうかわかりません。不慮の事故にあって、首の骨を折られて車いすになってしまった方、生まれながらに力がなくて、体が不自由な方々。そういう方々をサポートするワンちゃんがあります。これを介助犬と呼びます。私はこの話を聞いた時に、これは絶対役に立たせてもらおうと思いました。皆さん盲導犬はわかりますね、これは目が不自由な方のためにトレーニングされたワンちゃんです。

介助犬というのは、例えば歩けない、車いすなどで少しの段差があるときに、前から引っ張ってくれる、もっと大切なことは、体が不自由ということで、家族の人をお願いしようとしても家族の人が忙しい、例えばのどが渇いて水がほしいそんなときに、介助犬に「テイク水」というと台所まで行って、冷蔵庫を開けて、冷蔵庫の中のペットボトルを取って、冷蔵庫を閉めて、そのボトルを膝まで持つてくる、そこまでするのが介助犬です。

パソコンをやっている、CDが床に落ちてしまいます。かがめないで取れないようなときに、介助犬に「テイクCD」というとそのCDを拾ってくれます。

時には車いすが倒れてしまって、誰もいないで起き上がれない場合、介助犬に「携帯」というとどこからか探して持ってきてくれます。そして携帯で助けを求めると、すぐに椅子を起こしに来てくれます。これはすべて介助犬がやってくれます。その介助犬を得て人生が全く変わったとおっしゃいます。その介助犬の存在を多くの皆さんに知ってもらおうと私はサポート大使を引き受けました。そしてこれからも介助犬が一頭でも増えていくことを援助していきたいと思っています。

介助犬は、このようなホールにも入ってきていいのです。それは補助犬法というものが2002年に制定されました。橋本龍太郎さんがそれを制定してくださいました。

私どもはこのような介助犬のフェスタをやっています。私の右にるのが橋本夫人です。皆さんボランティアです。そして世の中に介助犬のことを知っていただいております。介助犬の必要な人は、15,000人、介助犬は今70頭しかおりません。一頭でも多く増やしていこうと思っております。

今日はポリオの話ですけれど、介助犬もよろしく願いいたします。募金箱を見たらよろしく願いいたします。

盲導犬と違うことは、盲導犬はということ聞いてはいけません。車が来た時にゴーといっても彼らは危

ないと思ったときは止まっているのです。ということは彼らは神経をとがらせた状態で生きなければならない。

介助犬は全く逆で「僕何したらいいのっ」て、しっぽをぶらぶら振っています。「携帯」ケイタイ頂戴といって取ってきて膝にのせてあげれば、いい子だねと言って褒められます。このような介助犬を一頭でも多くと思っております。

## 中国の古い諺を教えてくれた父

さて、私の父は今年、95歳になります。台湾に住んでおります。私の多くの台湾語の歌は、父が作曲してくれました。そして台湾語を忘れてはいけませんよと、家の中では台湾語を話すことを私たちに教えてくれました。

父がいつも私に必ずやってくれていたことがあります。それは仕事から帰ってきて、子供が家にいると、一つだけ中国の古い諺とか、教える子供に伝えたいと思っていたのです。私の父が教えてくれた中で、非常に大切な言葉の一つあります。

これは劉海粟という文人です。絵も描き、詩も書き、書も書く、そして政治にも精通し、経済もわかるという大変な方でした。104歳まで、元気で過ごしてなされました。98歳の時にこの詩を書きました。

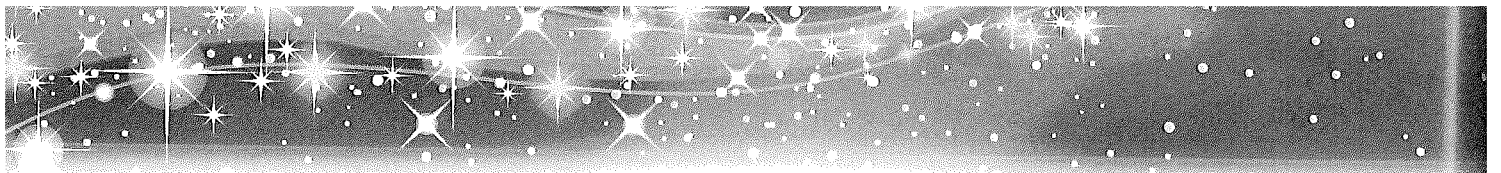
餐々七分飽  
事事対人好  
為善最快樂  
健康活到老  
劉海粟

「餐々七分飽」食べるのは七分目ということです。なぜ七分目かということ、腹八分目に医者いらずといいますが、人間は腹八分目だからもうやめようと思ったら大体七分目食べてます。だから七分目でプレーキを踏むのです。七分目で飽きるということは、もうそこで満足しようということです。

次は「事事対人好」これはことごとく人に対して好ましくしよう。いろいろな距離を持ってでもいいんですけれど、人間というのは、この人のここが嫌と思ったらそこばかり見えてきて、だんだんそこだけになってしまう、でも実際鳥の目をもって高いところから見ると、そのいやだと思っているその黒い点が、その人という大きな白い紙の上にあるほんの小さな点でしかないこともあります。

そしたら、ほかのいいところで付き合えばいいし、その点は、点としてそこは付き合わないで、ほかのいいところで付き合えば人に対して好ましく付き合うことができるということです。

そして次、「為善最快樂」善意のために何かをするということは、最も快樂である。今回ポリオ爆滅のために皆さんお集まりいただいたのもその中の一つになります。善というのは、ボランティアでありチャリティーであり、自分の服を脱いでまでそれをやろうかということ、そうでもありません。



例えば道を歩いていた、前のスーパーから出てきた方が、買い物袋が破れて中のものが出てくる、私は時間があるから早速拾って差し上げて、中からレジ袋もらってきて、「よかったですね」と渡したら、その方は、「ありがとうございます」といってくださいます。その時に「あー今日はなんかいいことをしちゃったな」さわやかです。この行為は私たちが世の中で生きていることに対して、役に立ったというご褒美なのです。それが「為善最快樂」です。そのご褒美は限りないパワーです。

これらのことを全部やると、「健康活到老」健康に老いるという所まで到達できる。老いるということは実はただ老いるのではなくて、人が仕上がっていくということです。中国には樹人という言葉があります。つまり樹木がきれいに咲いて実がなるのに、10年くらいかかります。樹人するには100年かかる。つまり、一生勉強であり、一生自分をブラッシュアップしていく、それが老という言葉の中に帰ってくるのです。

少し戻ります。この「餐々七分飽」餐々七分目にして飽きるという言葉ですが、これはもう一つの意味があります。物を食べるのはみんな欲ですね、あー食べたい、アッおいしいものが食べたい、これは一つの欲です。煩惱です。この自分の欲の結果を得るときに、七分に到達したら先ず満足しましょう、そこで良いと思しましょう。七分に来たら先ず一回喜びましょう。満足しましょう。それが最後の健康に老いていくということにとっても必要なことです。

「餐々七分飽」この言葉は父が教えてくれたことです。もちろん、努力はしなければいけない、しかし、70から満足というものを覚えていきましょう。というのがうちの父の教えでした。これは私の心の中に大切に、大切に持っていたいと思います。

それでは最後の一言をお届けしましょう。「悦己悦人」これは自分も喜び、人も喜ぶという諺です。人も喜び、自分も喜ぶという社会だったら円満ですね。でも自分ばかりよかったら相手の方は二度とやりたくない、相手がよくて、自分がよくなかったら今度は自分が二度とやりたくない。ですから、どこで良しという線を引きか、それは夫婦間もそう、親子もそう、会社の中でもそう、会社対会社でもそう。そして国対国でもそうです。お互いが喜びそしてよい世の中を作っていく、そのようにしていきたいと私も微力ですが頑張っていていきたいと思っています。

ポリオはあともうちょっと、もうちょっとで撲滅です。私の友達ジャッキー・チェンももう少しのポーズをして写真を撮っていますけれども、我々が少し顔を知られているというのは、こういう時に役に立てというミッションをもらっている気がします。ともに世の中からポリオをなくしましょう。そのためには、一人60円で一生その子は、小児麻痺にならないで済むのです。ポリオを撲滅するために、皆様の力をお借りしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。